

ウイグル語における自動詞を形成する形式

藤家洋昭 (大阪大学)

1. はじめに

本研究では、ウイグル語における自動詞を形成する形式を記述する。

ウイグル語は膠着語的性質が強く、他動詞から自動詞を形成すると考えられる形式がはっきりしている。また、それらは受身形を形成するとも考えられる。これまで、それらが自動詞を形成するのか受身を形成するかについては必ずしも明らかにされてこなかった。そこで本研究では、それらの形式が付いた動詞について、自動詞なのか受身なのかを考察し、記述する。

本研究の結果、ウイグル語における自動詞を形成する形式が付いた動詞の、自動詞と受身の多義性が語彙概念構造レベルで明らかにされた。

2. 基本データと考察

ウイグル語は膠着語的性質が強く、形式と意味の対応がかなりはっきりしている。動詞に関しても同じで、動詞の自他は、その対応があるものについては、基本的に形で区別することができる。ただし、日本語では例えば、「こわす」(他動詞)、「こわれる」(自動詞)、「こわされる」(受身)のように、いわゆる語彙的な自動詞と受身の、形の上での違いがはっきりしているのに対し、ウイグル語ではそれら語彙的な自動詞と受身形の、形の上での違いがはっきりしていない。例えば、*buz-* という動詞は「こわす」という意味の他動詞であるが、これに対応するものは *-ul* という形式を付けた *buzul-* であるが、これが「こわれる」なのか「こわされる」なのかははっきりしない。ちなみに、辞典類における記述がどうなっ

ているかという、たとえばウイグル語と日本語の対訳辞典[7]には *buzul-* という見出し語があり、語義として「こわれる」と記述されていて、「こわされる」とは記述されていない。

ウイグル語伝統文法[1][2]ではこれらの形式を語彙の自他の違いを表すものとしてではなく、ボイス (*derije*) を形成する形式として分析されてきた。ウイグル語伝統文法でのこれらについての記述をまとめると次のようになる(ウイグル語には合計5つのボイス (*derije*) があるとされているが、ここでの議論に直接関係するのは受身 (*mejhul derije*) である)。

動詞語幹 + *il* ~ (*i*)*n*

これら形式の違いが何によるかは、出現する音環境による。

-il 動詞語幹が、*l* 以外、母音以外で終わるものに付く。例: *buzul-*

-(i)n 動詞語幹が、*l*、母音で終わるものに付く。例: *tazilan-*

以上のように、これらの形式の違いは音韻的な出現環境の違いであり、意味の違いはないと考えられる。

受身文について見ておくと、ウイグル語では受身文は他の動詞文と語順の違いはなく、対応する能動文の動作主は、*teripidin* を用いて表すことができる。

(1) *Sinip nōwetchi teripidin tazilandi.* [2]

教室・当番・*teripidin*・そうじされた「教室は当番によってそうじされた。」

ただ、*teripidin* の使用は限られ、人間あるいは組織にしか付くことができない[1]。

対応する自動詞が想定できないような他動詞の場合は、*-il* ~ (*i*)*n* が付くことによって

得られる動詞は、受身形の動詞であると考えられる。対応する自動詞が想定できない他動詞とは、たとえば、いわゆる働きかけ他動詞（活動動詞）がその例としてあげられ、日本語においても働きかけ他動詞には自他のペアがない。

例:

他動詞	受身	自動詞
たたく	たたかれる	?
ける	けられる	?

問題なのは、対応する自動詞が想定できる場合である。

ウイグル語においてはいわゆる自動詞文と受身文の間に構文的な差がないため、自動詞と受身の、語形、構文等、表面的な形の違いによる区別は困難である。

3. さらなるデータと分析

3.1 さらなるデータ

前章で見たように、ウイグル語では、自動詞化と受身化の形の上での違いがない。それでは、ウイグル語においては、自動詞と受身の違いがないのだろうか。少なくとも、ここまでに示したデータにもとづく、違いがないように観察される。本当にそうなのだろうか。

ここで、自動詞化だけでなく、少し範囲を広げてこの問題を考えてみる。自動詞と受身が別の形で表わされるかどうかについて、自動詞化/受身化だけを見ても解決できそうもない。そこで、自動詞と受身形が別の形で表わされ得るかを見てみる。例えば、元が自動詞である *öch-*「消える」を考えてみよう。*öch-*には対応する他動詞である *öchür-*「消す」がある。そして、*öchür-*は受身にすることができ、*öchürül-*「消される」という形がある。つまり、自動詞と受身形は別の形である。

この場合も、*öchür-*が「消す」であるのか、

「消えさせる」であるのかという問題は残るが、たとえ「消えさせる」であったとしても、その受身は「消えさせられる」になり、決して「消える」ではないので、自動詞と受身の違いがあるということを否定するとはならない。すなわち、自動詞と受身は別物である。したがって、ウイグル語においても、動詞によっては、他動詞-受身-自動詞の対立があると言うことができる。

それでは、元が他動詞の場合はどうなのか。自動詞化と受身化で形の上で違いがないのは前述のとおり事実である。それでは、全く違いがないのか、意味の違いも含めて違いはないのかということになる。以下、意味の分析をしていく。

3.2 分析

3.2.1 語彙概念構造

本研究では、語彙主義の立場に立ち、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure: 以下 LCS と呼ぶ) を組み込んだ主辞駆動句構造文法によって分析する。LCS には、研究者よる、あるいは、同じ研究者によるものでもバージョンによる違いがあるが、本研究では先行研究[6]にもとづき、次の基本述語を前提にしている。

CAUSE: 外的な誘因が対象物の変化を引き起こすことを表す。

ACT: 継続的あるいは一時的な「活動」を表す。主語の意思によって活動のはじめと終わりを決めることができる。

ON: ACT と一緒に用いられると働きかけの対象を示す。

BECOME: 「変化」を表す。

BE: 静止した「状態」を表す。

AT: BE と一緒に用いられて、抽象的状态、物理的位置を示す。

これら基本的述語の組み合わせにより、具体的な語は次のようになる。

活動自動詞: [ACT]

働きかけ他動詞: [ACT ON-]

変化自動詞 : [BECOME [2 BE AT-3]

使役他動詞 : [[1] ACT ON-2] CAUSE
[BECOME [2 BE AT-3]]]

なお、本研究では、先行研究[5]にならい、LCS における項はあくまでも意味論的な値であり、統語的な項とは別のものであると考えている。統語論的な項は、主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar: HPSG)[4] の枠組みにおける語彙項目の中の ARG-ST の項として記述される。したがって、LCS の項は、統語構造には直接写像されない。

3.2.2 副詞的修飾語句との共起

動詞の意味を考察するために、副詞的修飾語句との共起関係を見る。具体的には、özligidin 「ひとりでに、自然と」 qesten'ge 「わざと」との共起関係を見る。これらは、意味的に ACT との相性に違いがある。すなわち、自分の意思でコントロールできるのが ACT なので、qesten'ge とは共起できるが、逆に özligidin とは共起できない。単純な例で確認しておく。

(2) Tursun qesten'ge yügürdi.

トルスン(人名)・わざと・走った「トルスンはわざと走った。」

(3) *Tursun özligidin yügürdi.

トルスン・ひとりでに・走った

(4) Qar özligidin éridi.

雪・ひとりでに・とけた「雪がひとりでにとけた。」

(5)*Qar qesten'ge éridi.

雪・わざと・とけた「雪がわざととけた。」
意思性については、次のテストでも確認できる。

(6) Tursunning qilghini yügürüsh.

トルスンの・したこと・走ること「トルスンがしたことは走ることだった」

(7) *Qarning qilghini érish.

雪の・したこと・とけること
このように、-ning qilghini 「～がしたことは」

と共起できれば意思性があると判断できる。以上のことから、yügür-, éri-は、それぞれ次のような LCS を持つと考えられる。

yügür-: [[1] ACT]

éri-: [BECOME [2 BE AT-3]] ただし、3 = 溶けた状態

問題になっている動詞 buz- とその派生動詞 buzul- をみる。

他動詞文 :

(8) Bala kompyutérni qesten'ge buzdi.

子供・コンピュータを・わざと・こわした「こどもがコンピュータをわざとこわした。」

(9) *Bala kompyutérni özligidin buzdi.

子供・コンピュータを・ひとりでに・こわした

受身文 :

(10) Kompyutér bala teripidin qesten'ge buzuldi.

コンピュータ・子供・によって・わざと・こわされた「コンピュータが子供によってわざとこわされた。」

(11) *Kompyutér bala teripidin özligidin buzuldi.

コンピュータ・子供・によって・ひとりでに・こわされた

子供が意思をもってコンピュータをわざとこわすということは可能であるが、子供がひとりでにコンピュータをこわすというのは、特殊な状況を想定しない限りありえない。これらは、対応する受身文においても同じであり、同様の文法性を示す。これらの例では、bala teripidin 「こどもによって」という語句があるため、受身文であることがはっきりしている。それでは、「コンピュータがわざとこわされた」という文がどうなるか見てみよう。

(12) Kompyutér qesten'ge buzuldi.

コンピュータ・わざと・こわされた「コンピュータがわざとこわされた。」

コンピュータがわざとこわれるということとは考えられないため、この文は確かに受身を表す。では、özligidin との共起はどうかというところ、

(13) Kompyutér özligidin buzuldi.

コンピュータ・ひとりでに・buzuldi 「コンピュータがひとりでに buzuldi (こわれた)」

これも非文ではなく正文になる。意味を考えると、「ひとりでにこわされる」という状況は考えにくいので、「ひとりでにこわれる」である。つまり、この場合の buzul- は受身ではなく語彙的な自動詞であると考えられる。したがって、buzul- は受け身と語彙的な自動詞の多義性を持つ動詞であると分析することができる。以上のことから、buz-, buzul- は次のような LCS を持つと分析できる。

buz- [1 ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2 BE AT-3]]

3 = こわれた状態

buzul- 「こわされる」 buz- [1 ACT ON-2] CAUSE [BECOME [2 BE AT-3]]

3 = こわれた状態

LCS は同じであるが、ARG-ST が異なるため、(いわゆる表層の) 文は違う形になる。

buzul- 「こわれる」 [BECOME [2 BE AT-3]]

3 = こわれた状態

4. 結論

ウイグル語における他動詞から自動詞を形成する形式である -il/-(i)n が付くことによって派生される動詞は、形の上では自動詞と受身の違いがないが、意味を考えると多義性があり、自動詞と受身の両方の意味を持つことが明らかになった。

参考文献

- [1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili*. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.
- [2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili*. Almuta. Mektep.
- [3] Muallim. *MP900*. Ürümchi. Muallim
- [4] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.
- [5] 今泉志奈子・郡司隆男(2002), 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理論:レキシコンと統語』東京大学出版会.
- [6] 影山太郎 (1999). 『形態論と意味』くろしお出版.
- [7] 菅原純 (2002). 『現代ウイグル語小辞典』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.